

今月の谷口雅春先生のお言葉

# 手伝いは子供の愛と生命とを引き出す

子供の愛の心を生かすこと

子供が、女の子なんかだとよく台所の仕事など手伝いたくて仕方のないような時代があつて、怪我<sup>けが</sup>でもしそうな危<sup>あぶな</sup>つかしい手つきでままごと<sup>ままごと</sup>みたいなことをしたがつてしようのない時がある。こういう時は子供の生命が出よう出ようとしている時である。その出ようとしている生命を出るよう出るように導いてくれる母親があれば、そういう母親に育てられる子供はどんなにか幸福だろうかと思えます。(中略)

「こうしよう、こうしよう」「こうしたい、こうしたい」と、樹木の新芽のようにまさに内部から溢<sup>あふ</sup>れ出ようと

している時に児童の生命を生かすというふうにしたならば、人間の内部に流れている能力が十分に発達するので、このなんとなく母親の台所仕事の手伝いなんかしたという時には、単に能力が発現しているだけではなしに、愛の心が動いている、自分からして、母親を喜ばしてあげたい、という愛の心が起こっているのだけれども、親の方では実用一点張りで、そんな愛を受けたって時間がかかるばかりである、邪魔<sup>じゃま</sup>になってかえって仕事が進ばないと、愛の心を功利的価値で計算して、実用一点張り、経済向き一点張りで片づけてしまおうとする。こうなると、せっかく愛の心で「親たちの手助けをして上げたい」という生命の働きが動き出そうとしている時

に、その生命を押し込めてしまうということになる。そして、青年期になってからその子供に「ちょっとわたしの手伝いをしておくれ」といつても、もうその子供は手伝いをする喜びを、その最初の芽生えにおいて摘まれてしまっているのです。せっかく「出よう、出よう」「手伝いしたい、手伝いしたい」と生命が芽吹いている時に「邪魔になる。うるさい！ あっちへ行つておれ。」こうやられたものだから、今度実際に手伝ってほしい時、大分子子供も成長して能力ができたとき手伝ってほしいと思つても、「何だ、母さんったら利己主義だわ」ということになって手伝わない不親切な子供ができる、子供の心は、親の心の影だったのであります。

〔『生命の實相』頭注版第28巻94～96頁〕

## 子供の才能を発達させる土台となる

子供をその天賦の才能の方向に伸ばす為には彼に手に負うた仕事を与えねばならない。

子供に仕事をさせてはいけないというのは謬見であ

る。適当な分量の仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は生命を建設的に使用する方法を教える。そして子供の生命のうちに建設的な傾向と創意的な傾向とを育てあげる。

建設的傾向——これは才能の発達の土台石となるものだ。この傾向が強ければ強いほどその人間は生長する。幼時に培われた傾向は生長してから養成した傾向よりも力強く根を張るのだ。

だから、幼時より生命を何か建設的な方向に鍛えることが必要である。それには大なり小なり仕事を与えなければならぬ。

特に小児自身の好む建設的な仕事を与えるのは好い。しかし、好きな仕事でもあまり長時間又はあまり多量に与えてはならない。分量が多すぎると、どんな仕事でもしまいには面白くなる——そして仕事というものは退屈なものだという先入観念を抱かせるようになる。

善い言葉で暗示を与え、子供を充分信頼してやり、仕事の種類と時間とを子供の好きにまかしてやるならば、

子供は滅多に仕事の選択に失敗するものではない。

子供を信ずること、及び善い言葉で「あなたは善い子だからこれが上手だ」というふうに導くことを忘れてはならない。

(新編『生命の實相』第22巻86～87頁)

### 子供の手伝いには親がほめて感謝すること

子供の手助けを真に喜んで感謝してやるようにすれば、子供は「愛は感謝を受ける」という事実を体験する。喜ばれることがどんなに嬉しいかということを経験する。これは人間の正しい生長に必要なことである。

子供に仕事を与える効果は、彼の生命に建設的傾向を与えることが第一で、手先の技巧の習練が第二である。第二のことも無<sup>むろん</sup>論重要である。幼<sup>ようじ</sup>時から手先の技巧が習練されていると、成長後も、実生活<sup>おほ</sup>上大いに役立つものである。(中略)

子供に仕事を与えるのを単に親の手助けをさすという意味ばかりするのは間違<sup>まちが</sup>である。親の利益を標準とする時、子供の不完全な仕事は親をイライラさせるもので

ある。子供は仕事をしたために喜ばれるよりも嘸<sup>ど</sup>鳴り付けられるようなことがある。それはやがて仕事に対する興味を失わすことにもなり、子供自身は愛の心で手助けしたことが感謝<sup>むく</sup>で報<sup>むく</sup>いられないことにもなり、情操教育の点<sup>はな</sup>から甚<sup>おもしろ</sup>だ面白くない結果を来たすのである。

その上、親の手伝いを主眼とするとき、必ずしも、子供を天賦<sup>てんぷ</sup>の才能の方向に生命を習練<sup>しんれん</sup>させることにならないかも知れないのである。だから、最初に子供の天賦の才能を、その子の器用さによつて看<sup>かん</sup>破<sup>ぱ</sup>し、巧<sup>たく</sup>みに導いて子供自身の選択によるような形にして、その器用さを発揮するような仕事を与えるのが最も好<sup>よ</sup>いのである。

子供は自分の選んだ仕事だから喜んでする。しかし、それが天賦の才能ある方面の仕事であるから、すればする程<sup>ほど</sup>上達する。喜んでする仕事だからエネルギーが浪費されない。それを親が賞<sup>ほ</sup>めてやる。感謝してやる。こうすれば子供の天才を發揮<sup>はくわい</sup>する上からも、愛の人格を養成する上からいっても実に好<sup>よ</sup>いのだ。

(新編『生命の實相』第22巻88～90頁)